

2022年9月の総評に代えて 高橋修宏

選者として初回となりますが、
それぞれの言葉から立ち上がる途方もないイメージ、
名付けがたい感情、不思議なユーモア、そして鮮烈なアイロニーなどに
驚きながら選考させていただきました。
これからも、よろしくお願いします。

マトリヨシカの (広田 土 大阪府)
いちばん中で
待っていて

わり算の
あまりのよう
に佇んで

何重もの入れ子になった「マトリヨシカ」のいちばん奥で待っているのは、何者か。また、「わり算」のあまりのよう佇んでいるのは、誰なのか。日常的な事物をモチーフにしながらも、答えのない謎を呈示する手捌きが魅力的だ。

記憶の中の湖は真水でした (まちりこ 埼玉県)

東京の夜は出口が多すぎて
転生前夜に見た猫がいる

もしや「記憶」によって、浄化されたのだろうか。なぜ「真水」なのか理由は示されないものの、不思議なリアリティがある。また、「転生前夜に見た猫」というファンタジーめいた存在も、夜の「出口」と響き合うことで、変貌しつづける「東京」という都市の精霊のように感じた。

一方、同じ作者による「人間は戦争にさえ飽きてしまう」など、戦争を対象とした作品のア

イロニーも光っていた。

箱舟は全員故人ならいいか (中矢 温 東京都)

木犀や鏡濡らしてから拭う

救済の象徴である「箱舟」に乗るのが、「全員故人」とは何たるアイロニーカ。シンプルな逆転でありながら、強烈な諦念のようなものを感じた。また、「木犀や」は五七五の定型律を踏まえ、あえかな抒情をかもします。「濡らしてから拭う」という、一見ささやかでありながら、分節された動作を取り合させたのが巧み。

八目鰻忌々しいほどの星夜 (藤 雪陽 長野県)

ホチキスがしん十二月八日来る

どこか奇怪なイメージが付きまとつ「八目鰻」。美しく清浄なはずの「星夜」さえ「忌々」しく感じるのは、そのせいなのか。また、「十二月八日」とは太平洋戦争の開戦日。「ホチキス」という日常的な文具が発する「がしん」という響きが、かすかな不安感さえ呼び起こすのか。

野分立つ熟成を待つジビエ肉 (田崎森太 東京都)

秋の雲ここより先はどれも帰路

「野分」という大きな気象と「ジビエ肉」という野趣あふれる食材。一見、関係のない二つが見事に響きあう。また、「秋の雲」と「帰路」の取り合せも定石なようでありながら、「ここより先は」によって確かなアリティを得た。

対岸は存在しない (からすまあ 神奈川県)
火が消えるまでを
目を閉じながら待ってた

悪役が便座カバーを裏返す
かけがえのない午後と知れずに。

「待ってた」、あるいは「知れずに」の一語により、各々が或るドラマのワンシーンであるかのような情景を喚起する。単々と無駄のない言葉で記されることで、どこかハードボイルドと名付けてもよいイメージが立ち上がってくるようだ。

前髪をパイナップルにされて海 (玻璃 愛媛県)

わたくしの骨から
作られるフルート

「パイナップル」にされた前髪とは、どんなスタイルなのだろう。いろいろと想像させる。ユーモラスでありながら、「海」の一語によって、明るい開放感を届けてくれた。また「フルート」からは、いかなる音色が聞えるのだろう。「わたくし」のさまざまな経験や感情を濾過させた、澄んだ（どこか寂しげな）響きが聞えてくるのだろうか。

誰も見ていない (こはくいろ 大阪府)
やっと優しくなる

向かいあう
矢印たちのまんなかの
空洞こそが
愛なのですよ。

「誰も見ていない」ことで、優しさは見返りなどを求めない純化されたものになるのかもしれない。また、「空洞こそ」が愛と断言するのも、同じようなイノセントな心性を感じさせる。

水平線を断頭台にして眠る (im 沖縄県)

雄大な「水平線」さえも「断頭台」としてしまう見立てが、実に鮮烈。そこで「眠る」のは、ガリバーのような巨人と化した主体なのだろうか。

封筒にどんぐりいれてみる眠る (大橋 弘典 群馬県)

それは、「眠る」ためのプライベートな儀式なのだろうか。夢の中では、「どんぐり」も森へと戻れるのかもしれない。静謐なリリックを感じる。

パサージュの向こうから見りや (大嶋 碧月 石川県)
俺達は氷結された腐肉だろうね

「パサージュ」とは、パリという都市の近代性を象徴するアーケードのような街路。「氷結された腐肉」となってしまった「俺達」とは、現代を生きるわれわれのことなのか。かつてパサージュという存在に近代の夢を見た遊歩者（ベンヤミン）もいたが、われわれはそんな夢から放逐され、遠くまで来てしまったのかもしれない。